

# 輝く ふくろいの人

## 空間が呼び覚ます感覚

## そこから見えてくるもの

現代美術作家／建築デザイナー 村松正之さん（下町）

「どうしてどういうものを求めるのか、自分でも説明できない。でも、内から湧き上がるものに抗うためには、やむを得ないですね。」

目に映る風景や形ではなく、空間としての存在感や、場が伝える感覚を感じ取ってほしい。」

そう話すのは、国内外で数々の作品を発表してきた村松正之さん（66歳）。

空間全体を作品として作り上げるその手法は、インスタレーションと呼ばれる現代美術の表現方法の一つです。

正之さんがアートの道を志したのは高校時代のこと。演劇部に所属していたことから、舞台芸術に興味を持ち、東京藝術大学へと進学します。

在学中は金属工芸の鍍金を専門に取

り組み、いくつかの個展を開いていく中で、いつしか表現の対象は一個のものから、空間全体へと移っていきました。

「日常の空間を、異質でエネルギーの高い、力のある場所にする仕掛けを考えたかったのかな」

創作の意欲はますます高まり、20代の最後には年間6回の展覧会を開催するなど精力的に活動していましたが、その年を境にしばらく表現の場から遠のいてしまっています。

「前へ前へと進みすぎて、精神的にも経済的にもパンクしてしまっただすね」と当時を振り返る正之さん。

その後、10年のサラリーマン生活を経て、袋井市へ帰郷します。

「実家に戻ってからは、自分で家をリフォームしたり、デザイン学校の講師をやったりしていました。」

そんな折り、陶芸をやっている高校時代の友人との再会があって、二人でそれぞれの作品を展示しようという話になったんです。

友人に誘われて17年ぶりに展示を行ったことを契機に、創作活動を再開。国内のほか、2007年にはドイツで、今年5月にはポージランドでも展示を行い、大きな関心を集め、高い評価を受けました。

そして、この9月には、月見の里学遊館で、ポージランドでの展示の帰国報告展を開催します。

「僕の場合、たまたまインスタレーションという表現をとっています。が、解釈の仕方を強要するものではないので、自分の思うままに感じ取ってほしいと思います。」

それが言葉にならなくても構いません。言葉に置き換えて安心したり納得したりせず、言葉にできない豊かさを大切にしてください。」

正之さんの作り出す空間から、あなたは何を感じるのか。ぜひ、その場に身を置いて体感してください。

月見の里学遊館での展示について、詳しくは本紙12ページ「眼差しの先 JAPAN ART展」をご覧ください。



◀ 正之さんの作品 「たくさんの私のための箱／2019」